

要約の方法

■ 今回のポイント

- ① 要約を行う意味
- ② 要約のポイント
- ③ 要約文を書く

【解説】

① 要約を行う意味

「要約」とは「要^{かなめ}」を「約^{つづ}める」と書きます。つまり、まとめたい文章の大事なところを押さえて、全体の量をギュッと小さくするのは、述べられていることの内容は変えないよう、大事な部分を残しながらサイズだけ変えてあげる、というのがポイントです。

② 要約のポイント

番組では、昔話「浦島太郎」のあらすじを三〇字で要約する、というお題を出します。「浦島太郎」は、主人公の男が海辺で亀を助ける場面、その亀に連れられて海の底にある竜宮城に招待される場面、浜に戻ってからおみやげにもらった玉手箱を開けるとおじいさんになってしまう場面など、「要点」になりそうなポイントがたくさんあります。先ほど、要約のポイントは内容を変えないことだと言いましたが、まとめる人が対象のどこに注目するかによって、要約文は当然変わってきます。

さらに一〇字で要約すると、話のほとんどを割愛せざるをえません。しかし、誰がどうした？ というシンプルな文にすることによって、話の背骨となる部分を明確にすることができます。

ちなみに、物語を要約すると、究極的には「主人公が〇〇する話」、もしくは「主人公が〇〇になる話」のいずれかに集約されます。パターンが限られるからといって、物語の価値が減るわけではありません。物語の魂は細部にこそ宿っていますので、その細やかな表現の数々こそ、私たちの胸を打つのです。

物語の魅力は、言葉や表現のしかたを楽しむところにあります。一方、小論文などで課題として出てくる文章は、全体の骨格をつかみ、主題や構成を的確に読み取る力が要求されます。文章の要点をつかまえる技術は、自分が書く側にまわったときにもつながっているのです。

③ 要約文を書く

今回は、生徒たちと一緒に要約文の作成に取り組みます。ルールは次の三点です。

- 一〇〇字程度の三つの文にすること
- 文には主語と述語を含むこと
- 二文目を「しかし」、三文目を「そのため」で始めること

頭の中だけで考えずに、まずは対象となる文章をカタマリに分けたり、印をつけたりして、要約するためのメモを作ってみましょう。

繰り返し出てくる言葉や表現を見つけたら○で囲んだり傍線を引いたりします。こうして、文章を支えているキーワードを見抜き、それによって構成される全体像を把握できれば、要約のために必要な要素が見えてきます。ちなみに、要約文では、具体例や比喩、主張の根拠となる数字などは割愛してかまいません。

なお、説明文では、筆者が取り上げた話題に対する一般的な見解が述べられたあと、筆者自身の考えが表明され、それを再度まとめてある場合が散見されます。それぞれのカタマリ（段落）の大事なところを抜き出して「しかし」と「そのため」でつないであげれば、条件に沿った要約文を作ることができます。

要約文を書けるようになったら、これから出会う文章の読み方にも影響します。逆接の接続詞「しかし」や「だが」が出てきたら、「あ、このあとに筆者の考えが出てくるのかな？」と想像できます。「そして」や「さらに」が出てきたら「あ、これは強調するために具体例を増やしているんだ！」と気がつけるようになります。

加えて、文末に「〜と考えられる」や「〜ではないだろうか」という述語が見えたら、「ここに筆者の見解が表明されている！」と確信することもできます。そして、接続詞と文末に注目すると、あらゆる文章の「要」が見えるようになります。

現代は情報が洪水のように押し寄せてくる時代です。その情報の海を航海するための武器が、文章を要約する力なのだと考えてよいでしょう。